希望の涙　　**マルコ 14:66～72**

今日は前回ゲッセマネの園での祈りの後、イエス・キリストが捕らえられ大祭司カヤパの屋敷に連れてこられた場面です。その様子を知ろうと弟子のペテロが後からついてくるわけですが結局、イエスと自分の関わりを強く否定し、最後は泣き崩れて終わるという場面です。誰しも人生の中で涙を流すことがある、もしくはあったことでしょう。それは嬉し涙、悔し涙、悲しくて流す涙、そういったものでしょう。ここでペテロはどのような涙を流しているのでしょうか？　悔し涙でしょうか？　悲しみの涙、絶望の涙でしょうか？　そうではありません。それは希望の涙です。どうして希望の涙と言えるのでしょうか？そのことをご一緒に見てゆきたいと思います。

主イエスが捕えられた時、弟子たちは皆、蜘蛛の子を散らすように逃げ去ってしまいました。しかしペテロだけは、主イエスが連行され、ユダヤ人の議会の人々によって尋問を受ける大祭司カヤパの家まで、遠くから そっとついて行き、人々にまぎれてその中庭に入ったのです。既に 54 節で語られています。「ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の庭の中にまで入って行った。そして、下役たちと一緒に座って、火に当たっていた。」ここに「イエスの後について」とありますがここは弟子として主イエスに従うというのと同じ言葉が用いられています。同じ従うということばですが意味合いとしては全く違うと思います。ペテロは確かに、主イエスのことを気にかけ、その身を案じています。そのこと自体、他の弟子たちが逃げてしまったことに比べればまだましと言えるでしょう。しかし、主イエスの後を遠く離れてついて行く姿は弟子として主イエスに従っているとはとうてい言えないものでしょう。このペテロの姿こそ私たちの姿なのかもしれません。ペテロは大祭司の中庭に入り、下役たちと一緒に座って火に当っていました。つまり、人々の間に紛れ込んで、目立たないように、自分がイエスの弟子だと悟られないように、イエスなんていう人とは関係ないふりをしていたのです。それもまた私たちの日常の姿かもしれません。54 節にペテロが「火に当たっていた」とありますが、 この「火」という言葉は原文では「光」です。もちろんペテロは焚火に当たって暖を取っています。その焚火の光が彼を照らしている様子をマルコは描いているのです。しかし焚火の光に照らされたペテロの顔はどんな顔だったのでしょうか。彼はこれまで、主イエスというまことの光の元で、その光に照らされていました。 しかし今、ペテロはそのまことの光から遠く離れて、焚火の光が彼の顔を照らしているのです。こんな風にも言えるでしょう。焚火が無ければ真っ暗闇の中にペテロは置かれているのです。その暗闇の中にいる人間の姿を焚火の光がスポットライトのように映し出しているのです。気持ちとしては闇に紛れて、人々が自分に無関心でいてくれることを祈るような気持ちだったことかと思います。

さらに、ことはペテロの顔を映し出すだけでは終わらなかったのです。この後、焚火の光に照らされていたために、彼は見咎められ、追及されてゆくのです。66、7 節「ペテロが下の中庭にいると、大祭司の召使いの女の一人がやって来た。ペテロが火に当たっているのを見かけると、彼をじっと見つめて言った。『あなたも、ナザレ人イエスと一緒にいましたね。』」ペテロが火に当たっていたのは、その方が怪しまれないからです。中庭に入りながら、一人で暗闇の中にいたらかえって不審に思われるからです。つまり人々の間に紛れようとして火に当っていたことで彼の顔が照らし出され、彼が何者であるかを明らかにしたというわけです。聖書には召使いの女性の言葉が丁寧に書かれていますが原文はもっと雑な言い方です。直訳すれば「あなたもあのナザレの人と一緒だった。イエスとかいう」関西弁なら「あんた、あのナザレの人と一緒やったでしょ。確かイエスとゆうてたけど」しかしこの女性の言葉はペテロがイエスの弟子の一人だと断定しているわけではなく、もちろん捕まえて役人に突き出してやろうという意図から出たのでもありません。彼女は軽く、気づいたことを口に出しているだけです。ところがこの軽い問いがペテロを動揺させます。その問いかけに彼は「何を言っているのか分からない。理解できない」と言うのです。これも原文においては、ペテロの動揺が伺えるような、しどろもどろな言い方になっています。一緒に居たとも居ないとも言わないのです。つまり答えをはぐらかしています。「えっ、何のこと？　言ってることが分からない」という感じでしょうか。つまりしらばっくれているのです。都合の悪いことを聞

かれてしらばっくれることは私たちもよくします。しかしここで彼がしたのは、主イエスとの関係の否定です。主イエスのことを知らないと言うことがここから始まっているのです。

この女性（マタイの福音書には「別の召使いの女」とありますがどちらであっても）は出て行こうとするペテロを追って来て、今度は周りにいる人々に「この人はあの人たちの仲間です。」と言ったのです。ペテロはそれを再び打ち消しました。「あの人の仲間なんかではない！」つまり主イエスとの関係をさらに否定したのです。しかし彼が慌てて否定すればする程、彼のガリラヤ訛りが目立ってしまいます。今度は居合わせた人々が「確かに、あなたはあの人たちの仲間だ。ガリラヤ人だから。」（マタイの福音書では「ことばのなまりで分かる」と言ったのです。するとペテロは 71 節「嘘ならのろわれてもよいと誓い始め、『私は、あなたがたが話しているその人を知らない』と言った。」のです。神に誓って私の言うことは本当です。「そんな人は知りません」と。こうしてペテロは三度、主イエスを知らないと言ってしまったのです。

ペテロが三度、主イエスを知らないと言った、その経過を見てみると、一度目から二度目、三度目へと、次第にはっきりとした強い否定になっていることが分かります。最初は、「えっ、何のこと」としらばっくれただけだったのが、次にははっきりとした否定になり、最後には神にかけての誓いになっていくのです。ペテロは最初から、イエスを知らないと言ってイエスとの関係を 否定しようと思っていたわけではないでしょう。むしろ自分の身の安全を確保した上で遠くからそっと主イエスの後について行き、事の成り行きを見届けようとしていたのです。その動機は主イエスのことを心配しているから来ているのです。ここでのペテロの心の変化は何を私たちに教えているでしょうか？

先ず第一に私たちが持つ不安といった否定的な感情は私たちの想像を超える大きな力を持っているということです。最初は小さくてもどんどんと大きくなり、その不安の感情が巨大なものとなって自分を押しつぶしそうになると感じ、恐怖を覚えるのです。そしてその恐怖から逃れようとしてとんでもないことを口走ったり、相手の心をひどく傷つけるようなことを言ってしまうのです。人間の感情とはそれぐらいの威力を持っているのです。

第二に人々の間に紛れて、遠くからそっと、誰にも気づかれずに主イエスについて行こうとする歩みは、結局主イエスと自分との関係の全否定に行きつくということです。ペテロはせめて遠くからなりとも主イエスについて行こうとしました。私たちはそこに、ペテロの「せめてもの誠意」を見ます。そして私たちもそのように、せめてもの誠意をもって主イエスに従って行こうとするのです。けれどもそのペテロの行きついた先は、「そんな人は全く知らない」という誓いでした。遠くから主イエスに着いて行って、何か不利なことがあればすぐに逃げ出せるような信仰は結局は不信仰に行き着く、普段なら出てこない信仰からかけ離れたことを言ってしまうかもしれない。そのことをこのペテロの姿は教えているのです。

そして第三にこの記事はだめな信仰者の例としてペテロのことを取り上げているわけではないということです。ペテロを他山の石としなさい。失敗例として学んでおきなさい。そんな意味ではないのです。この後、ペテロは自己嫌悪の思いと後悔をもったまま歴史の片隅に消えていったわけではありません。それどころか神に大いに用いられ、新約聖書の中に 2 通のペテロの手紙があります。そしてペテロは最後逆さ十字架で殉教したと言われています。ですから今日の箇所はペテロの黒歴史ではないのです。言うなら、ここで彼のキリスト信仰が根本から問われ吟味されたということです。それはつまり信仰者は人生のどこかで、主イエスの前にちゃんと立たなければならない時が来るということです。あるいはペテロのように「あなたも、ナザレ人イエスと一緒にいましたね」という問いに答えなければならない時が来るということです。その時に、主イエスの前にきちんと立ち、主イエスとの関係を明確にしようとしないならば、主イエスとの関係を完全に否定してしまうことにならざるを得ない。それこそがこの話から私たちが受け止めるべきメッセージなのです。

ペテロが三度目に「そんな人は知らない」と激しく誓った時、 鶏が二度目に鳴きました。ペテロははっと我に帰り、そして泣き崩れます。ペテロのこの涙には、とりかえしのつかないことをしてしまった後

悔の思い、自分の弱さ、ふがいなさへの嘆き、挫折の悲しみなどが凝縮されています。しかしこの涙にはもう一つの要素があるのです。それは彼が泣き出したのは、鶏の声によって、主イエスの 30 節「まことに、あなたに言います。まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」のお言葉を思い出したためでした。主イエスが、この自分のことを、勇ましいことを偉そうに言っていても、いざとなると逃げ出してしまい、遠くからそっとついて行くことしかできず、そして何気ない問いに動揺して結局は主イエスとの関係を否定してしまう、そういう弱く情けない裏切り者、罪人である自分の本当の姿を、ありのままに見つめておられた、そのことへの深い驚きと感動があるのです。彼はこの時、主イエスが自分のことをどれだけ深く知っていて下さったのかに気づかされたのです。主イエスが自分のことをそのように深く知っておられるということ、それはつまり愛して下さっているということなのです。良いところも悪いところもありのままの自分を知ってもらっている、つまり受け入れてもらっている時に人は愛されていると実感するのです。

ペテロはここで涙を泣き崩れるほどに流しましたがそれが救いの根拠となるわけではもちろんありません。ただ主イエスはすでに幾度もご自分が罪の贖いである神の小羊として十字架にお架かりになること、また復活し、やがて天に帰り、最後は再び地を裁くために来られること（再臨）まで語っておられます。そしてその通りのことが進んでゆきます。そしてこの場面は、主イエス・キリストの受難、十字架の死と復活の中に置かれているのです。つまりペテロの否認は、この主イエスの歩みの中に置かれていますし、ペテロの涙は、この主イエスの十字架の苦しみと死とによって包まれているのです。そこにのみ、ペテロの救いがあります。ペテロのことを、本人よりも深く知っておられる主イエスは、強がりを言いながら結局知らないと言ってしまう彼の弱さをも、 裏切りの罪をも、全て背負って十字架にかかって死んで下さったのです。そして主イエスは父なる神によって、死者の中から復活なさいました。それは主イエスの十字架の死によって、人間の罪が贖われ、赦されたことを父なる神が示して下さったということです。神の赦しの恵みが、私たちの罪と、罪によって滅びをもたらす死の力とを打ち破って下さったのです。ペテロは後悔して泣いたから救われたのではありません。主イエスの十字架と復活によってこそ、ペテロの涙は救いの喜びへと変えられたのです。

私たちも、人生の様々な場面で、ペテロと同じように信仰を試されます。そこにおいては、遠くからそっと、人々に紛れて、というわけにはいかないのです。私たちはその試練の中で、自分の弱さと罪、主イエスに従い通すことができない挫折を味わいます。ペテロは「嘘ならのろわれてもよい」なぞととんでもないことを言いつつ「そんな人は知らない」と言ったのです。「嘘なら呪われてもよい」とは自分のことばが真実であることを最大限に表す言い方です。もちろんそれは嘘であって主イエスのことを知っているわけです。しかしペテロはここでそんなことばを使わなければならないぐらい自分が窮地に立たされていたのです。彼の思いとしては自分の人生を呪い、主イエスを呪ったとも言えるかもしれません。「自分を呪う」、それは主イエスの弟子となった自分、主イエスについて来てしまった自分を呪うことです。弟子になんかならなければよかった、そうすればこんな苦しい目にあわないですんだのに、ということです。それは主イエスを呪うことにつながります。イエスが自分に声を掛けたから弟子になってしまった、イエスなんかと出会わなければ今頃もっと普通に、平和に暮らしていられたのに、みんなイエスが悪いんだ、という思いです。ペテロはこの時そういう思いで、「イエスなんか知らない」と叫んだのではないでしょうか。私たちもまた、信仰の試練に直面する時にそのように神を呪い、主イエスを呪い、信仰者になった自分を呪い、共に生きている人を呪ってしまうことがあります。うまく行かなかったら人のせい、教会のせい、そして主イエスのせいというわけです。しかしそのような私たちをも主イエスは、十字架と復活による救いの恵みのみ手の中に捉えて下さっているのです。その主イエスの恵みのみ手に気づかされのは、私たちが自分の罪にくずおれて泣く時です。しかし主イエスの恵みのみ手の中で泣くことができる私たちは幸いなのです。その涙は、絶望ではなく、赦されて新しく生きる希望をもたらす涙となるのです。今日の週報のみことばを読みます。祈ります。